
白の守護者-Guardian Noel-

しいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の守護者 - Guardian Noel -

【コード】

N8010M

【作者名】

しいな

【あらすじ】

ファンタジーが大好きで絵本作家を目指す月宮真白はある日、不思議な少女によって異世界へといざなわれた。妖精が踊り、ドラゴンが空を飛び、美しいお姫様がいる。そんな真白の望んでいた筈の世界で真白は幻想の中の現実を知ることとなる

……

「あなたを守る 楯になる。」

世界を救うなんて大それたものじゃない。
これは、たった一人の女の子を守る為に戦う少女の物語。

第1話「あたしの望んだ世界」(1)

月宮真白は夢を見ていた。

舞台は現実とは違う、剣とか魔法とかが存在するファンタジーな世界。その世界でのあたしはなんと！ 世界を救う勇者なんだ。

たくさんの仲間を引き連れて、圧倒的な力で迫り来るモンスターたちを倒し、人々を救いながら旅を続けて最後には魔王を倒して世界に平和を取り戻す。そんな笑いあり、涙あり、ロマンスありの冒険劇。

主人公はあたしでヒロインは魔王にとらわれたお姫様。救い出したお姫様からお礼のキスなんか貰っちゃったりして

「おい真白。」

なんだよ、今良いところなんだから邪魔しないで……うへ……
「起きると言っているんだ、真白！」

ゴソッ

と、頭に衝撃が走り、私は覚醒した。

「はっ！」

「私の授業で居眠りとは……良い根性してるなあ？ なあ？」

「あれ……？」

私の目の前に広がるのはいつもの教室だ。時計を見ればちょうど3時。5時限目の授業もそろそろ終わりだった。そして

「言い訳はあるか？ あるなら聞くだけ聞いてやるぞ？」

私の目の前にいたのは担任の月宮真雪だった。

27歳独身の英語教師、性別はメス、スタイルも顔も人並み以上なのに性格はガサツ。ちなみに好きなものはお酒とあたりめとガチムチなAV。最近行き送れ気味なのに焦りだして、男を見る目が野

獣のようになって来た。そりゃあ逆に男も出来ませんで。

「まーしーるー（怒）」

「は……はい！」

そんなことより取り合えずはこの場を凌ぐ言い訳を考えないと……目の前では27歳独身教師が拳をバキバキ言わしている。

「あ……あれです。あたしは持病を持ってまして……」

「なんだそれは？」

「所謂不治の病でして……その……授業を聞くと眠くなると言っ……」

「ほーう。喜べ真白。ここにそんな不治の病を治すとびきりの特効薬があるぞ？」

ハーツ、と25歳独身教師が拳を温め始めた。

「いやいやいや、その……そう言うのはやめましょうよ……ね？」

「ん？ 何か言ったか？」

「暴力反対！ 暴力反対！」

「さーて、いつくぞー！」

「お姉ちゃんやめてえええっ！」

「学校で姉と呼ぶなといっただろ！」

「きゃああああっ！」

ドゴンッ！

「ふおおっ……………」

「少しは反省しろ。と、もう時間か。はい、じゃあ今日の授業はこゝまで。」

キーンコーンカーンコーン。と授業終了のチャイムが鳴った。

「きりーっ。」チャイムと共にクラスの委員長の手元がかり生徒達が一斉に立ち上がった。（約1名除く）

「礼。」

委員長の声と共に生徒達が一斉にお辞儀をした（約1名除く）

そしてそのまま教室内は一日の授業を終えた生徒達の会話による喧騒に包まれていった。

その間もずっと机に突っ伏していた約一名は。

あたし

(お姉ちゃんの今日の分のビール……暖かくしておいてやる……。)
と、姉への地味な嫌がらせに頭を巡らしていた。そんなあたしに
向かって

「やつほーましろん。頭大丈夫？」

と話しかける声があった。私の親友の岡崎茜だった。

「うんまあ、少しタンコブができたけどね。とありあえずは大丈夫
だよ。」

さすがは昔からの腐れ縁。姉のDVによる満身創痍のあたしに優しい言葉をかけてくれるなんて……良い友達に恵まれているよ、あたしは。

「いやそつちじゃなくて、頭の中の方。またどんな電波な夢見てたのかなーって。」

前言撤回。このアマ、人を精神異常者扱いしやがって。どうせあたしの頭の中は年中花畑だとか思っているんだろ？

「で、何か用？」

「目が怖いよ、ましろん……。まあいいや、今日このあと暇？」

「え？このあと？」

「うん、これから皆でカラオケ行くんだけどさ。ましろんも行かない？」

「うーん、カラオケか。」

なるほど、このあたしの美声をそこで披露して欲しいというわけか。まあ友人Aの誘いならばカラオケに行つてあたしの十八番のティルスオブザイ センスのテーマ曲を披露するのもやぶさかではない。この前歌った時は「何この曲？」状態だったけどね。

「ほら、私よりも歌が下手な子がいないと私惨めじゃん？ だから行こうよーましろん。親友でしょー。」

「あんたにとつて親友とは蹴落とすものらしいな。そしてすでにあなたは親友から友人Aに格下げされているよ。そしてたつた今友人Aからタダの知り合いの中の一人に降格したところだよ！」

「あ、でもさつきまでは親友だと思っただけでいたんだ。」
「昨日チョコを貰ったからね。」

20円で四角くて色々な種類があるアレね。

「じゃあこれ挙げるから機嫌直してよ。はい、アーモンド味。」
「わあい。」

ありがとう親友よ。

「で、どう？ 行かない？」

「うーん、せっかくの親友の誘いだけど……今日は予定があるんだ。」

そう言っただけはかばんを持つと立ち上がった。

「予定って……あそこ？」

「うん。」

「ましろんは偉いねー。」

「そんなんじゃないよ。好きでやっている事だし。」

そっか、と茜は私の机の上にちよこんと腰掛けると

「今日は良い評価もらえると良いね。」

「何を言ってるの、いつも満員御礼大絶賛。お茶の間もアルマゲドンだよ。」

「はいはい。」

と笑顔で私を見送ってくれた。

「じゃあまた明日ね。親友。」

私は茜に向かって手を振った。

茜も私に手を振りながら

「また明日。友人A。」

誘いを断ったからか、私が降格させられていた。

第1話「あたしの望んだ世界」(1) (後書き)

はじめまして、しいなと申します。

初めての小説投稿でなかなか緊張しております。(ガクガク)
取り合えずこの作品は異世界トリップファンタジーとして、話的には結構シリアス風味に進みますが(1話だけ読むと、とてもそうは思えないとは思いますが・・・)そんな中でもバカな主人公と明るいキャラたちで盛りあげて気軽に読める小説にしたいこうと思っています。

まだまだ文章なんかも稚拙なところが多いと思われるので感想やアドバイスなどいただけると励みになります。

第1話「あたしの望んだ世界」(2)

高校から徒歩で10分ほど。町の片隅にその施設はあった。星峰孤児院、身寄りの無い子供達が保護を受けている場所だ。

「そこで勇者マシロは剣をとってドラゴンの首を切り裂いた。ずぶしゃああ！」

「わー」「きゃー」

そこにいるのは小さな子供達だった。子供達は施設のベンチに群がっており、その中心には真白がいた。

「マシロ！ ここは俺に任せて先にいけ！」 『ア……アンソニー！』

「アンソニー！」 「死なないでー！」

真白は本を片手に身振り手振り大振りで何かを披露していた。子供達もそれに反応して騒いでいる。

「アンソニーは遠い目をしながら『なあマシロ。俺……この戦いが終わったら……結婚するんだ。ラ プラスの愛 と。』マシロは言

った。『アンソニー！ 駄目だ。2次元とは結婚できない！』」

「目を覚まして、アンソニー！」 「二次元の為に死亡フラグなんて悲しすぎるぜ！」

それは絵本だった。真白は自作の絵本を子供達に読んで聞かせていたのだ。

真白は学校帰りによくこの孤児院によると子供達の相手をしてあげていた。絵本を読んであげるのもその一環だ。

「マシロ、危ない！ぐふっ。ふ……マシロ……俺……お前の事……

……イソギンチャクの次くらいに好きだったぜ……」 『アンソニーがマシロを庇い敵の凶弾に倒れる！ ドサツ！ マシロはアンソニーに駆け寄り『ああ、私も……君のことガガンボの次の次くらいに好きだったよ。』と優しく語りかけた。』

「ケンカは駄目よ！」 「仲悪いなこいつら！？」

こんな内容ではあったがなかなか子供達には好評のようで。

「こうして勇者マシロとお姫様は末永く幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし。」

「ハッピーエンドでよかった……」「アンソニーも無事にマカデラックスを買えたんだな……」

パチパチパチ、と読み終わると同時に盛大な拍手が起こっていた。

「本日も満員御礼！ ご清聴どうもありがとうございます！」

あたしは立ち上がって子供達の拍手喝采を浴びた。

「ねえねえ次の新作は！」「続編は無いの！。」

子供達からは早くも次回作のおねだりだ。うんうん。やはりあたしには絵本作りの才能があるようだ。と

「確かに話は面白いけどよー。」
ぶっきらぼうな声が一ツ。

「絵のほうはどうにかならないのかよ。」

孤児院の少年、健太だった。

「線がぐちゃぐちゃなのは言うまでもないとして、勇者は目が三つあるし、アンソニーが禿げてるし、お姫様は角が生えているし……」

「勇者の額にあるのは目玉じゃなくて冠の宝石！ アンソニーは禿げてるんじゃ無くて防具を着けているの！ お姫様のは冠だよ！！」

くそ、好き勝手言って……この絵は下手なんじゃなくて前衛的なの！ そのうちこの絵一枚に数十万とか付くんだから。みてなさいよー！

「あとさー、勇者に自分の名前をつけるのってどうなの？」

「い……良いじゃん別に。」

「真白ねーちゃんつてもしかして自分の願望を絵本にしてるだけ？」

「い……良いじゃん別に。」

「もう高校生なのに……」

「ムキーンッ!!」

待て待て私、子供相手に我を忘れるな。そうだ、落ち着いて……
「良いじゃない別に。」

と、女の子が一人話入ってきた。

健太と同じ孤児院の子供の理子だ。

「真白の絵本、何だかんだ言っただけ健太だっていつも楽しみにしてるじゃない。」

「え……ま……まあな。」

おや、いつも文句ばかり垂れるからあんまり気に入ってないのか
と思ったが……そうか、これがツンデレか！ 別に萌えないな。

「お話だっけ面白いし、色々勉強になるじゃない。」

うむうむ、その通り。私の絵本は子供に勇気と希望を与えるだけでなく、社会の厳しさや人間関係の大変さなんかもしっかりと教えてあげられるような教育的な絵本なのだ。理子は良く分かっているなあ。かわいい、かわいい。

「いい年こいてこんなメルヘンチックな絵本ばかり書いてるような大人になっちゃいけないって勉強になるでしょ!!」

「理子ちゃん？ ちょっとお話しようかなー？」

た……耐える私。小さな少女の頭を鷲？みにせんと動き始めている私の手よ静まれ！

「なに？ 真白。……はっ！ もしかして……」

私の呼びかけに振り向いた理子は私の表情を見て何かを感じ取ったようだ。自分の過ちについてどうやら分かってくれたか。物分りの良い子はあたしは好きだよー？

「私との将来について話し合おうっていうことね！ 大丈夫、真白は私が養ってあげるから。ずっと今のままのメルヘン脳な真白でいいのよ。」

「う……うん……ありがとう……」

ポツ、と顔を赤くする理子。こんな8歳の子供にまで将来を心配されている私っていったい……

とほほ、と悲しみにくれながら時計を見るとそろそろ5時近くだった。そろそろ帰って夕御飯の準備をしないといけない時間だ。

「さてと、そろそろ帰りますかね。」

「えーもう帰っちゃうのー。」「もつと遊ぼうよー。」「

「ははゴメンね。帰ってこわーい鬼ババアの御飯を作らないといけないんだ。」

両手の人差し指を立て、拳を頭にくつつけ鬼の角を再現してみせる。

「ふーんそんなに怖いの？」

「怖いぞー。男なら見境無く食おうとしちゃうような行き遅れの女だからね。健太も気をつけなよー。ちよつと気を許すとガブツ！つて……」

「へー……誰が行き遅れの色情魔だつて？」

「こ……この声は……」

ギギ……ギギ……と壊れたおもちゃのように後ろを振りむくとそこには……

「うふ 一緒に帰ろうかと思って迎えに来たら……なかなか言うてくれるじゃないか？」

「あは……あはは……」

「ちなみに私のストライクゾーンは精々高校生まで……な。」

「それでも十分犯罪ぐふっ」

一連の惨状を健太は見ていた。

拳を脳天に振り下ろされ、気を失った真白を真雪が「お邪魔しましたー。健太君、5年たつたらよろしくねー（じゅるり）。」「言い残し、ずるずると引きずって帰っていった。

まるで死体のように運ばれていく真白を見て、健太は思う。

（女って……怖いなあ……。）

健太このとき9歳。

まだまだ女を知るには早い時期であった。

第1話「あたしの望んだ世界」(2) (後書き)

第1話その2です。

しばらくはストックがあるので定期的に更新していけそうです。

異世界トリップといいながら全然行く気配が無いですね・・・展開遅くてすいません。

プロローグ的な存在の第1話はあと2回ほど続いてしまいましたが、よろしければお付き合いください。

また感想、アドバイスなどいただけるとうれしいです。

第1話「あたしの望んだ世界」(3)

「ほらほら、きりきり飯作れー。」

「今作っているでしょ！ 少しは待つてよ！」

姉に引きずられての帰宅後。キッチンに立って晩御飯の準備中のあたしは、野菜の入ったフライパンを火にかけながら言った。

「あとビールもー。」

「だから少しは待ちなさい！ ほら、野菜炒め一丁上がり。」

野菜炒めをお皿に装い、飢えた独身27歳（料理のスキル0）の前に差し出した。続いて冷蔵庫からビールを出すとジョッキに注ぐ。そのままジョッキを電子レンジに入れてしばらく・・・

チン

「はい、ビールお待ちどうさま。」

「いやーこの一杯の為に生きて熱ー！？」

いやー豪快に行きましたなー。多分6〜70 くらいあったと思うんだけど。

「真白！ なによこれ！」

「あれ？ 知らないの？ 今流行のホットビールだよ。若い子には大人気らしいよ。ビールの風味が際立つんだってさ。」

しれつと嘘をついてやった。

「そ……そう。確かによく味わえばこう……ほろ苦さとかビール独特の甘みが……。」

ゴクゴク……とそのまま真雪はチンチンに熱くなったビールを飲みだした。

今日の朝の復讐は完了だ。（ちなみに後で知ったことによると実際にホットビールと言うものはあるそうだ。しかも本当においしいらしい。）

あたしは二人分の味噌汁と御飯を装い机に置くとテレビのリモコンスイッチを押した。画面ではNHKのニュース番組が流れており、いつものキャスターが淡々と今日の出来事を語っていた。そんな出来事の中で

「まだ見つかってないんだな。」

真雪がひとつのニュースに反応した。それはあたしたちの住んでいる市内の出来事であった。

ニュースの流れている画面の右上には表題として『行方不明の少女、いまだ発見されず。』と表示されている。

「そろそろ1週間だよな。」

一週間前、一人の女の子が行方不明になったのだ。女の子は隣の高校1年生で、学校帰りに忽然と姿を消したのだと言う。不審人物も見られず、遺書のようなものも存在してはいなかった。ただ、遺留品としてとある寂れた神社に女の子の髪留めが落ちていたのだと言う。

そして未だにその女の子の行方は分かってはいない。

「ここらへんも物騒になったもんだねえ。」

「そうだね。」

とはいえ隣の町の子が消えたと言われても直接的なかわりは無かった。今一実感は湧かない。道を歩いている時に心なしか警官が増えたかな？と思うくらいだ。

「まあ真白も気をつけなさいよ。はい、ごちそうさま。」

そう言っつて真雪は「おっふる〜おっふる〜」と言いながら出て行ってしまった。片付ける気は無いらしい。

「はあ、まあいつもの事よね。」

あたしは二人分の食器を流しへと運んでいった。

「疲れたーっ。」

片づけを終え、一風呂浴びるとあたしはそのままベットに倒れこんだ。食後の適度な労働に心地よい疲労感が眠気を誘ってきたが「だめだめ、ちゃんとやる事はやらないと。」

と、自分に言い聞かすとむっくり起き上がり、机に向かっていった。

そこで取り出したのはスケッチブックと鉛筆、そして

「あつたあつた。」

あたしのお気に入りの絵本だ。

「絵本の新作書く前にもう一回読もうっと。」

小さな時にお父さんとお母さんに買ってもらったものだ。ストーリーは勇者が囚われのお姫様を助けに魔王を退治しに行くと言うスタンダードなもの。

あたしは絵本を開き、その世界に没頭していく。

ページを開けば剣を持った勇者がモンスター相手に奮闘している。妖精が踊り、竜が空を飛ぶ……そんな幻想の世界。

そこに詰まっているのは夢だったり愛だったり希望だったり……。そんなものを絵本は私たちへと届けてくれる。

何時の時代だってそうだ。男の子は勇敢な勇者に憧れ、女の子は美しいお姫様に憧れる。

あたしは女のクセに勇者にあこがれるといった、ちよっぴり男勝りな感じだったけれど、あたしだって絵本から大きな夢を貰った事には変わりはない。

やがて子供はその夢を忘れて次第に大人へとなっていくけれど、小さいころ、あの時見つけた輝きは本物だったはずだ。

だから、私は絵本作家になりたい。

子供のころ私が夢や希望を貰ったように。あたしも子供達に夢や希望を届けたい。

あの輝きを、皆にも見つけて欲しい。……なんてちょっと柄にも無いかな？

「さてと、頑張ろう！」

パタンと絵本を閉じ、あたしは鉛筆を握ると物語を書き始めた。今回も最高のハッピーエンドにしてやろう。と決めながら。

早朝、いつものように朝7時に起床。睡眠時間が足りていないけど、それは学校で補うとして、私は着替えを済ますと朝ごはんを作り台所へ向った。

すると机の上に一枚の紙が置いてあった。そこには『今日は会議があるので先に行きます。By真雪』と書かれていた。

今日は一人での朝食らしいので食パンを一枚トースターに入れる、フライパンでベーコンと卵を炒めてちよつとした朝食の完成だ。

そして朝のニュースを見ながら朝食を食べ終わると、片づけを済まし、あたしは家を出た。

いつも通りの道を歩きながらいつも通りの速度で学校へと進む。だけど

「……………」

とあるところであたしは足を止めた。

見上げる。それは長い長い薄汚れた階段だ。その先には赤い大きな鳥居が見えた。

そう、あの女の子の遺留品が見つかったと言う神社だ。

いつも何とはなしに通り過ぎている神社だったが、何故だか今日はそこがものすごく気になってしまった。

なんだろう、こんなこと言ったらまた茜に電波女呼ばわりされそうだけど……

何かが、あたしを呼んでいる気がする。

しばらくあたしはその階段を見続けていた。そしてあたしの足は自然と神社へ向かって一步を踏み出そうとして

「おっはよー！ ましろん！」

茜の足払いによってあさつての方向に突き出され、そのままバランスを崩したあたしは背中から倒れこんだ。

「つてなにするのよ！」

「いやーなんだかバランス悪そうだったからさ。」

茜は悪びれもせずに

「で、一体なんですつと階段なんか見ていたの？」

「ん？えつと……」

どう言っ た物か……

「もしかして頭「おかしくなつてなんかいないからな」……頭

おかしくな「なつてないつて言つているだろ！」。

ちえー、とふてくされた顔になる茜。

ああ、朝っぱらから疲れる……

「もう良いでしょ。早く学校行こつよ。」

「そうだねー。もう遅刻確定だけどね。」

は？ 今なんて言つたコイツ？

「ほら、もう8時20分だよ。」

「……………」

あたしは一体どれだけ階段の前でボーツとしていたんだろうか……

「言い訳を聞こつか？」

27歳独身教師がすごい形相で睨んでくる。

「あたしの授業に遅刻するとは……良い度胸だな。」

茜も一緒に遅刻したのに何であたしだけ……と思つたらそういえば茜は隣のクラスだった。読者のみなさまもあたしと同じクラスだと思いだつたとは思つが。

「えーとですぬ……………」

今はとにかく言い訳を考えなければ……ここはまあシンプルに

「実は自転車がパンクしまして……」
「お前は徒歩だろ、電車通学だろ。」
「そうだった！ この言い訳は使えないか……いや、だったらあ
しがいつも乗っている乗り物に変えれば
「実は電車がパンクしまして……」
「お前の一言で大災害が起こったぞ。」
駄目か……くそう、こうなったら
「実はあたしがパンクしまして……」
「真白の頭パンクしてるのはいつものことだが。もういい、廊下
に立ってる。」

ガラガラピシャン

「それじゃあ授業再開するぞー。」
と扉越しに真雪の声がする。

教室の外に締め出されたあたしは両手に水の入ったバケツを持ち
ながら廊下に立っているという何とも古典的な罰を実行中だ。朝か
らついていないなあ……

「あ、そういえば茜は？」

茜も完全に遅刻したはずだ。きっと私と同じく廊下に立たされて
いるに違いない！と、隣のクラスのほうを見れば

「いやー先生遅刻しちゃってねえ。」

「先生……っ！?!?!?!」

隣のクラスの先生（42歳、男性、妻子もち、不自然な頭の毛は
植えている）がバケツ両手に立たされていた。

第1話「あたしの望んだ世界」(3) (後書き)

長々としたプロローグ的な第1話も後1回で終わりです。

今日の夕方までには投稿できると思いますのでよろしければ読んでいただけるとうれしいです。

第1話「あたしの望んだ世界」(4)

その日の放課後のこと

「あー、もう。今日はツイていないなあ。」

「そんなのいつものことじゃん。」

あたしは茜と共に帰り道を歩いていた。

しばらく教室でおしゃべりをしていた為、空はすでに赤く染まり始めていた。

「ところで今日はアソコ行かなくて良いの？」

「うん、まだ最新作は出来ていないからね。」

「ふーん。まあ未来の大作家目指して頑張つてよ、親友。」

「あれ、昨日は友人Aだったのに、親友に格上げされたんだ、私。」

「あれ？ そうだっけ？」

「あんたは一晩立つと前日のことをスッパリ忘れるタイプだよね……。」

とか他愛も無い話をしながら歩き続ける。と、

「あ……。」

再びあたしはあの神社の前で足を止めた。

階段の先に夕暮れを背後に佇む神社はなんだか不思議な雰囲気を感じている。

「ましろん、朝もここで止まっていたけど、この神社に何かあるの？」

「あ……いや……。」

別に何かあるわけではない。けどどなんだか無性に気になるのだ。もう一度階段を見上げる。すると階段の先の鳥居の上で何か白いものが光って消えた。

「ゴメン、ちょっとあたし行ってくる。」

「え？ あ、ちょっと待ってよ！ ましろん！」

(何、今の光は?)

あたしは階段を駆け上った。真っ赤な鳥居が次第に近づいてくる。

「
何かの音がした。それはやがて確信に変わる。」

（あたしを……呼んでいる。）

ペースを上げて一気に駆け上がった。

そして

そこに

いた

あたしが見上げるのは神社の屋根の上。

そこに、一人の少女が立っていた。

白いワンピースを纏い、銀色の長い髪を少女はたなびかせている。年齢5〜6にも見えるほどの小柄な少女、そのエメラルドグリーンの瞳はまっすぐにあたしに向けられていた。

「はあ……はあ……早いよましろん……ってあれ？ 何この子？」
茜の声が遠く聞こえる。

やがて少女はふわりと屋根からあたしの目の前へと降り立つと

「行きたいか？」

「え？」

その小さな口を開いた。

「どこに？」

とあたしは聞き返す。

そして、その少女の口から放たれた言葉は

「あなたの、望んだ世界。」

瞬間、光が溢れた。

目の前の少女は姿を消し、代わりに光の扉が目の前には現れていった。

(行くのならこの扉をくぐれば良い。行きたくないのならばこのまま立ち去っても良い。)

頭の中に少女の声が響く。

(さあ、世界を救いに行かないか?)

何なんだこの展開、何なんだこの少女。

見知らぬ少女が、あたしに世界を救いに行けと言っている。

いきなりの突拍子も無い展開。何もかもが分からない。

だけど、決まっていた。

あたしの答えは……

「ねえ……茜。」

「な……なに？ ましろん。」

あたしは後ろの親友に振り返り

「ちよつと世界を救いに行ってくる。」

そう言っただけ扉の中に飛び込んだ。

(ふむ、よろしい。)

そう言っただけあたしを包み込んだ光は消えていく。

「ちよつとましろん!? ましろん!?」

取り残された茜は、ただただその光が消えていくのを見送った。

光に包まれたあたしには、少女の音が響いてくる。

(ファンタジー
幻想へようこそ。)

あたしの冒険が、始まるのだ。

第1話「あたしの望んだ世界」(4) (後書き)

ようやく第1話が終わりました。

長々とすいませんでした・・・

次回からようやく異世界での話が始まります。

これから色々と話は動いていくと思いますので、またよろしくおねがいします。

第2話「幻想へようこそ」(1)

ファンタジー
(幻想へようこそ)

目を覚ますと木々の間から茜色の空が見えた。

「ここは……？」

どうやらあたしは仰向けに倒れているらしい。ゆっくりと身を起こすとあたしの周りには青々と茂る木々が見えた。どうやらここは森の中のようなのだ。

「本当に来ちゃったんだ。」

幻想の世界に。と、あたしは改めて実感する。

もちろん実はこれがドッキリで、大量の懐中電灯によってあたしが光に包まれる演出を行った後、クロロホルムかなんかで気絶させられてどこぞの森の中に放りこまれて「異世界に来たぜヒヤッホー！」と騒いでいるあたしを茜がそこらの茂みの影からニヤニヤしながらカメラで隠し撮りしているのかもしれない。神社であった不思議な女の子も実は茜の従妹か何かで(屋根から飛び降りたのはワイヤーアクションだ。)二人で揃って「ドッキリでしたー」とか言っただけでドッキリ大成功！と書かれた看板片手にあたしの目の前に飛び出てくるのかもしれない。

そしてこっさり取った映像を二二動画あたりで流して「厨二病テラワロスww」とか言うコメントを書きまくるのかもしれない。そんな可能性も少しは考えはしたが、すぐに吹き飛んでしまった。感覚で分かる。ここはもう、あたしのいた世界ではない。

「さて……と……。」

取り合えずどうしようか。と、あたしは思考を開始する。

なんだか勢いで来てしまった感じは否めないなので、はつきり言っ

てこれからどうするかなんて何にも考えていない。

世界を救えといわれたって具体的にどうしたらいいかなんて分からないし……

でもまあこのまま森に居続けるのは危険だし、真っ暗になってしまふ前に村でも探そうか。と、今後の行動予定を立てたところであらうと思った。それは今のあたしの状況についてだ。

今、あたしが持っているものといえばこの制服と鞆ひとつだ。

つまり、今のあたしはRPGでいう『勇者：Lv1 装備無し』状態なのだ。つまり相当弱い。

「あはは、これってスライムにあっただけでも死ぬよねー。」

あははー

……

……

……

「何か武器を探そう！……！」

そうしないとヤバイ。とにかくヤバイ。まさかの初戦でスライムに負けて【おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない】状態は絶対に嫌だ！

まずあたしは鞆の中身をチェックしてみた。出てきたのは

「ノート……筆箱……教科書……携帯電話……財布……。」

まあここら辺は良いとして

「スケッチブック……色鉛筆……あとはチルチヨコにちんすこう……」

ろくなものが入っていない

「どうでもいいけど、ちんすこうって真ん中を伏せると卑猥だよな。」

……ちゃん ころ。」

ろくなものが入っていないさ過ぎて本当にどうでも良いことまで考
えてしまう。極めつけは

「耳……」

でっかくなっちゃた！ の奴ね。いつだったか一発芸をやった時
に使ったものがそのまま鞆に入っていたらしい。学校で持ち物検査
されなくて良かったあ……。もし検査されてこんなものが出てきた
ら、そのままマ ーコールがかかって、あたしが一発芸をやらされ
て、教室大寒波コースだったなあ……

でもまあせつかく見つけたので

「でっかくなっちゃったー！」

使ってみた。

「キヤーツ!？」

悲鳴が聞こえた。

振り向けばそこには一人の少女がいた。

金色の髪に白い肌。さらには特徴的な長く鋭い耳を持っている。

エルフという奴だろうか。

その少女がなにやらおびえた様子で木の影に隠れながらこちらの
様子を窺っていた。

その視線はあたしの顔も右側。でっかくなつた耳に向けられ……

「で……でか耳オバケー!!」

少女は叫んでいた。

あれ?もしかして……

異世界とのファーストコンタクト、大 失 敗?

第2話「幻想へようこそ」(1) (後書き)

今回からようやく異世界での話が始まります。

メインではないですがヒロインも出てきて少しは華やかになっていくはずなので、またよろしくお願いします。

この作品のタイトルについて触れられるのはもう少し掛かりそうですが……

第2話「幻想へようこそ」(2)

「マ……マイネームイズマシロ……」

最悪のファーストコンタクトの後、なんとかエルフの少女とコミユニケーションを図ろうとあたしは頑張っていた。

エルフって言うのは北欧の小民族だ。だから英語なら通じるかと思っただけ、やはり言葉が通じないのか目の前の少女は依然おびえた様子でこちらを見続けている。

(くそ、北欧なんだからドイツ語かフランス語が話せればよかったんだけど……)

あいにくドイツ語はアイン、ツヴァイ、タンジエントしか知らない。(しかも最後の違うし)

フランス語にいたってはジュテムしか知らない。初対面でいきなり「愛しています」なんて意味の言葉を使ったら相手もドン引きだろう。

だから万国共通後っぽい感じの英語で頑張っているのだが……

(駄目か……)

少女からの反応は無い。

というかそもそもここは異世界だ。あたしのいた世界の言葉が通用するかどうかも怪しい。

前途は多難だ……

「ああ、お腹すいた……」

と、ここに来て空腹感が襲ってきた。

そういえば夕御飯前にここに飛ばされたんだよなあ……ちんこうでも食べようかなーと、お腹を押さえていると。

「アノ、おなかすいてるデスカ？」

「日本語じゃー……ん!?」

「ド……ドウゾ。」

「ありがとう。」

エルフの少女が木の実を差し出してくれた。あたしはそれを一つ手に取ってかじりながら

「さつきはゴメンね。なんだか怖がらせちゃって。」

「イエイエ、ワタシのほうこそずっとビクビクしてすいません。」

そう言っただけでエルフの少女はにこやかに笑った。

少女の名はリネット。この近くの村の住民なのだという。金髪碧眼の美少女で、近くで見るとはじめて分かったのだがこの子、相当胸がでかい。そんなリネットが何故ここに来たのかというと

「空から光が降ってクルのが見えてデスネ。それで様子を見に来たデスヨ。」

「空から……」

うはー、あたしはそんな登場の仕方をしたのか。よく生きてたな。

「それでアナタを見つけたデスケド……耳ガ……」

「ゴメン。アレは忘れて頂戴。」

一時の気の迷いです。黒歴史です。あたしのログにはなにもない。

「あ、耳と言えば……」

ふと思いついた。

「？」

と首を傾げるリネットにそのまま置いて、と伝えるとあたしは立ち上がってリネットの後ろに回る。そして……

「えい。」

「ひヤアアアアッ!？」

リネットの耳をつまんでみた。一度触ってみたかったんだよね、エルフの耳。感想としては見た目はとんがっていて硬そうだったけれど、思ったより柔らかい。

「ナ……ナニするデスカー……ッ!?」

「あ、ごめん……。」

しまった。思った以上に嫌がられてしまったか？

「本当にゴメン！もしかしてすごい嫌だった？」

「その……イヤというわけでは無いデスケド……。」

心の準備が……と小声で何かを言いながらリネットの顔が真っ赤に染まる。リネットは腕を組み、内股になると、その場でもじもじしだした。腕を組んだおかげでその豊満な胸がさらに強調されているのは黙っておく。

「ア……アノ……」

しばらくもじもじした後、相変わらず真っ赤な顔でリネットが話しかけてきた。

「アナタは……これからどうするんデスカ？」

「いやー実はあたしもどうして良いか分からなくて……」

たはー、と頭をかきながら言うあたし。うん我ながらテキトーだ。そんなあたしに向かって

「だったらワタシの村に來ませんか？」

リネットがうれしいお誘いの言葉をかけてくれた。

「え……いいの!？」

「ハイ、ワタシは一人暮らしデスので余裕もありマスシ……」

「やったあ！ ありがとうリネット!」

あたしはリネットの手を取りブンブンと振った。

これで夜の森で野宿するという最悪パターンは回避できた。それにエルフの生活がこの目で見れるなんて最高じゃないか！

「こっちの世界に來てよかった!」

世界が変わっても何とかなるもんだ。順風満帆。順調すぎて怖いくらい。

「それではドウゾこちらニ……」

そういつて村に向かって歩き始めたリネットの横をあたしは歩き続ける。

「本当、リネットに会えてよかったよ。あのままじゃあたしこれからどうして良いか分からなかったからさ。」

「い……いえソナ……」

「またも顔を赤くするリネット。照れ屋なんだろうな。」

「あ、でも……」

「一抹の不安があたしを襲う。」

「リネットはあたしの事歓迎してくれているけど……村の人たちは大丈夫？」

「人種といい、着ているものといい明らかにあたしはこの世界にとつての不審者だ。そんな不安げに見つめるあたしに向かってリネットは」

「大丈夫デスヨ。心配しないでください。だって……」

「その名を、口にします。」

「アナタは……ソラビト様デスカラ。」

第2話「幻想へようこそ」(2) (後書き)

ヒロインその1ようやく登場です。

ここから少しずつ真白の天然ジゴロっぷりが発揮されていく予定です。

ちなみに第2話も後2回続きます。ここらで話の雰囲気がいよいよ変わって行く予定です。

第2話「幻想へようこそ」(3)

「ソラビト様バンザイー!!」

「バンザイー!!」

「お・おー!!」

なんだろうこの異常なまでに祭り上げられている状況は……

今、あたしがいるのはリネットの住んでいるエルフの集落だ。集落には木や藁で作られた高床式の住居や倉庫が立ち並び、鶏を飼っているらしき小屋のようなものも見えた。

(これがエルフの生活か……)

なんて感慨に浸っている余裕はあたしには無かった。

なぜならあの後、リネットに案内されてここを訪れたあたしは着くや否やいきなり男勢に拉致られ、集落の中心部の広場に突然用意されたこのなんだかゴツイ感じの椅子に座らされ、エルフの村の住民全員に崇められてしまったのだ。

え？ 何この状況？

そしてそのまま大宴会に突入、飲めや食えや踊れやの大騒ぎになつてしまった。

「ヨウ！ お譲ちゃんがソラビト様力。イヤーべっぴんさんダア。」

「ど……どうも。」

「キヤー、ソラビト様ーっ。これも食べテー。」

「あ……ありがとう。」

「ふおっふおっふお……まさか生きてイルうちにソラビト様を拝めるとはノオ……」

「お……おめでとつございます。」

髭面のおっさんに若い女の子に老人に……次々と住民達があたしに寄ってきては絡んでくる。

確かに歓迎されないのは困るけどここまで歓迎されるのも逆に困りものだ。あたしは一体どうすれば……と途方にくれていると。

「ほらほらミナさん、ソラビト様がお困りデスヨ。」

「リネット〜っ。」

救いの手がやってきた。

「おっと、スマンスマン。」

「ジャアまた後でネ〜。」

「ふおっふおっふお。」

と、あたしを取り巻いていたエルフたちが去っていくと同時にリネットがあたしの横に腰掛けた。

「びっくりしまシタカ？」

「あはは……大分……。」

呆けた感じのあたしの顔を見てリネットがくすくすと笑う。

「もともとエルフは騒ぎが好きデスカラ。それにソラビト様が現れたとナレば大騒ぎにもなりマスヨ。」

「ねえリネット。そのソラビト様って何？」

さつきからずっと疑問に思っていたことだ。どうやらあたしはそのソラビトという奴だからこんな祭りに祭り上げられているようだが。

「ソラビト様はデスネ……。」

リネットが語り始める。

「空からやってキタ人のことデスヨ。昔からアル伝承なんデス。光と共に空からやってキタ人が世界を救ってくれるト……。」

「世界を救う……？」

「ハイ。」

リネットは頷いた。

「このあたしが……？」

「ハイ。」

リネットは大きく頷いた。

「マシロ様が……世界を救うんデス。」

その言葉を聞いて、あたしは胸が熱くなった。

この世界に来るときに不思議な少女は言った。

あたしに、世界を救いに行けと。

今、目の前でリネットは言った。

「あたしが、世界を救うのだと。」

あたしの望んだ世界。そこで綴られる物語。その主人公はあたしなんだ。

「ずっと、ずっと夢に見てきた展開だ。」

「よし……。」

震える胸を落ち着かせ、あたしは握りこぶしを作ると

「やってやるーっ！」

立ち上がり、拳を大きく天へと突きかざした。

「……オーツッ……！」

とそれに呼応するようにエルフたちの歓声が響いた。

「マシロ様、頑張ってください。」

リネットもうれしそうにあたしの左腕に腕を絡め、身を摺り寄せてきた。

「そんなあたし達を見て」

「リネットー。やけにソラビト様にべったりだな。何かあったか？」

髭面の男が冷やかに来た。

「実はソノ……。」

と、リネットはもじもじしながら小さな声で

「マシロ様に私の耳を掴まれマシテ……。」

瞬間、辺りが凍りついたように動きを止めた。

エルフたちの顔には一様に驚愕の表情が浮かんでいる。

「な……何？」

「あたしだけが理解できていない。」

そして、

「……ウウウオオオオオオオッ……！」

先ほど以上の歓声が上がった。

「リネット！ やったじゃねエカ！」

「ソラビト様！ リネットのコト、よろしくナ！」

「今日は二重にメデタイゾ！」

宴は最高潮に盛り上がっていく。

「ねえリネット、これどういうこと？」

あたしには皆が何でこんなに騒いでいるのかは分からなかったが「ふふ、秘密デス。」

いたずらっぽくリネットが隣で笑うのでまあいつか、と流れに身を任せてあたしも盛り上がる事にした。

宴は続く。

喧騒に包まれて、夜は更けていく。

心地よい眠気と共に、あたしの異世界での初めの日が終わっていく。

やがて、宴が終焉を迎えると、周りのリネットや飲み疲れて寝てしまったエルフたち同様あたしも床にゴロンとなって目を閉じる。

きっと明日も良いことあるだろう。そんな楽観的なことを考えながら。私はまどろみに落ちていった。

だが、そんな何もかもがうまくいくはずはなかったのだ。次の日、轟音と共に目を覚ましたあたしは

地獄を みる。

第2話「幻想へようこそ」(4)

ズンツ！

と、轟音が響いた。

巨大な破壊音と地を揺らす振動にあたしの意識は覚醒した。

「何！？」

飛び起きる。見ると、周りではエルフたちがなにやら慌しく走り回っていた。と、

「ソラビトの譲ちゃん。こっちにくるんだ！」

髭面の男が慌てた様子であたしのところに走ってきた。

「何があっただんですか！？」

「魔獣^{モンスター}ダ、しかもノワール・ベルの紋章付……屍食鬼^{ゲール}ダ！」

ズゴオンツ！

すぐ近くで再び轟音が聞こえた。見れば、木造のエルフの家の一つが粉々に粉碎されていた。そしてそこには

「チツ、もうキヤがッタ！」

巨大なトカゲの化け物がいた。巨大な頭、体から生える六本の足。真っ黒な皮に覆われた全身からは異臭が漂っている。

これが……屍食鬼^{ゲール}。

あたしがこの世界に来て初めて見る魔獣^{モンスター}だ。実際に魔獣^{モンスター}が見れたらすごい迫力なんだろうな！なんて暢気に考えていた自分を笑ってやりたい。

今、あたしの目の前に鈍重と聳える巨大な魔獣^{モンスター}は迫力があるなんてものじゃない。威圧、殺意、享楽……そんなものが魔獣^{モンスター}から感じ取れる気がした。

「リネット！ 何が何デモ、ソラビト様を守れ！」

「ハイ！ マシ口様、こつちデス！」

男の呼びかけに、リネットがあたしの手を引いて走り出した。髭面の男は弓を手にとると屍食鬼^{ゲール}に向かって走っていく。

「今のウチに逃げまシヨウ、マシ口様。」

「でもっ！」

皆が・・・とあたしは背後を振り返った。

エルフたちが巨大な屍食鬼相手に戦っている。あるものは弓を放ち、あるものは斧やナイフで切りかかっている。だが、巨大な屍食鬼はエルフたちの猛攻に怯みもせず暴れまわる。

尾を振り回し、足で踏みつけ、巨大な顎で食いちぎる。

屍食鬼の周りには瞬く間にエルフたちの血の海が出来ていった。

遠くからでもはつきり見えてしまった。人の形をしたものがあつという間に只の肉塊になる光景を。

「うぶっ……。」

「マシ口様!？」

思わずその場にしゃがみこんでしまった。胃の中が逆流してきそうだった。胸が焼けるように痛い。涙がこみ上げてくる。

初めて見た、人がバラバラになって死んでいく光景。そうだよ、何を考えていたんだ。ここは確かに幻想の世界だ。けどあたしが見ているものは

現実だ。

「リネット! お譲ちゃん! 逃げ口!」

髭面の男の叫び声が聞こえた。

エルフたちを跳ね除けて、屍食鬼があたし達に向かって突進してくる。その巨体から繰り出される突進は、想像以上に速い。

あたし達と屍食鬼との距離はあつという間に縮んで

「マシ口様!」

リネットがあたしを抱いて横に跳んだ。間一髪、グールの突進を避けてあたし体は地面に無残に転がった。

「げほっげほっ……うえぼっ……。」

あたしはそのまま地面に温かいものを吐き散らした。

「ぜい……ぜい……と息を整え隣に倒れているリネットに振り向くと
「リネット！」

「無事……デシタカ……。」

「リネット……足がつ！？」

リネットの右足が赤黒く腫れ上がっていた。屍食鬼ゲールの突進をよけ切れなかったのだ。

「ワタシは大丈夫デス……それヨリも早く逃げテ……。」

ズシン……ズシン……

方向転換を終えた屍食鬼ゲールがゆっくりとこちらに近づいてくる。

リネットを抱えて逃げるか？無理だ。あの突進力を見ただろう？あつという間に追いつかれて終わりだ。だったら……

スツ、と一人あたしは立ち上がった。そして

「ちよつと借りるよ。」

と、リネットの腰に下げられていたナイフを抜き取った。

「マシロ……様……？」

そのまま歩き出す。一步……二歩……そして屍食鬼ゲールの前に一人立ちふさがった。

ナイフを屍食鬼ゲールに向ける。

「さあ来なさいよ……この化け物！」

覚悟を……決めた。

「駄目デス！ マシロ様！」

「お譲ちゃん！ ヤメロ！」

「ソラビト様！」

リネットやエルフたちの声が聞こえた。だが、それらは全てあたしの目の前に立つ屍食鬼ゲールのうなり声によってかき消されていった。

足が震えた。手も緊張でおぼつかない。周囲の時間の流れが緩く感じられる。すごいな、これが命を賭けるって言う事か。今にも心臓が止まりそうなほどのプレッシャー。そんなものを背負いながらあたしの意識の全ては目の前の敵に向けられている。

やがて屍食鬼ゲールが一際大きな方向を上げ、あたしに向かって突進し

てきた。

(来るっ！)

あたしは小さなナイフを両手で握ると、大きく上に振りかざす。屍食鬼^{ゲール}の顔が目前に迫る。その大きな赤い口が開き、白い牙があたしを切り裂こうと光っていた。

激突する。

あたしは屍食鬼^{ゲール}に向かって躍起にナイフを振り下ろした。そして

ズシャアアアアツ

あたしの視界が真っ赤に染まった。血だ。血飛沫が空中に浮かんでいるかのような錯覚さえ見える。あー、やっぱりナイフじゃ無理があつたかな？生暖かい血があたしの体中に纏わり付く。口の中も鉄の味でいっぱいだ。

「あ……」

足元がふらついた。手に力が入らない。体が冷たくなって意識が遠のいていく。

そんなあたしの視界に移るのは血の海。

そして、真っ二つに両断されて地面に横たわっている屍食鬼^{ゲール}の姿だ。

(あれ？あたし……やれてるじゃん。)

そうだった。あの時あたしは確かに屍食鬼^{ゲール}を切り裂いたんだつた。何でこんな小さなナイフ一本でそんなことが出来たんだらう。分からないや……

だけど、この結果は間違はなくあたしがもたらしたものだ。

(すごいなあたし、魔獣^{モンスター}を倒しちゃった。)

まるで勇者みたいだ。と思う。

刃が肉を絶つ感触。

屍食鬼ゲールの断末魔の叫び。

目の前の魔獣モンスターの死体。

ああ……なんて……なんて……

気持ち悪い。

ドサッ

と、あたしは血まみれの地面に倒れこんだ。

リネットが泣きながらあたしを呼ぶ声が聞こえた。

だけど、あたしの目はもう開いてはいられなくて、ゆっくりと視界に幕が下ろされる。

薄れ行く意識の中、再びあたしはあの少女の声を聞いた気がした。

（ファンタジー幻想へようこそ。）

今はそれが、ひどく薄気味悪く聞こえた。

第2話「幻想へようこそ」(4) (後書き)

第2話もようやく終了です。

展開遅いですね……

でも次回でようやく物語の軸となる場所での話が始まります。

ここからだんだんと明るい雰囲気が少なくなっていくかもしれないですね…… (とはいえ主人公が基本バカなのでそこまで暗くはなりません。)

3話以降でだんだんとタイトルの意味にも近づいていくと思いますので、またよろしく願います。

まだまだ未熟な作品ですが、感想、アドバイスなどいただけるとありがたいです。

第3話「白き雪のプリンセス」(1)

(よかったな真白。)

誰かがあたしに語りかけてくる。

あの子の少女か？ いや、違う。聞こえてくるのはそんな幼い声ではなかった。

(君の望んだ世界に来て。)

五月蠅い、黙れ。何があたしの望んだ世界か。

(何が違う。エルフがいただろう？ 剣があっただろう？ モンスターがいただろう？ きつと魔法だってあるぞ。美しいお姫さまだっているかもしれない。)

確かにあったよ。私が望んだもの。でも……

(戦いだってあったじゃないか、憧れてたんだろう？ 剣を持って、モンスターを倒す事に。)

確かに憧れてたよ。でも……

(モンスターが現れたとき、ワクワクしただろ？)

違う、あたしは怖かった。

(モンスターを倒した時、爽快で気持ちよかっただろ？)

違う、あたしは気持ち悪かった。

(ここは、君の望んだ世界だろうか?)

違う……あたしが望んだのは……。

(君が望んだのはあくまで夢だ。幻想という夢だ。)

そう……夢……。

(ここは夢じゃない。幻想という現実だ。木々も、風も、人の命も、
全て君のいた世界と変わらない。)

分かっている……分かっているよ……。

(それを理解したなら今は良い。さあ、目覚めの時間だ。)

待って……待ってよ!

(バイバイ)

待ってって言ってるだろ……コンチクショー!!

あたしの叫びが木霊する。最後にチラツと影が見えた。それを見
て理解した。今あたしに語りかけてきたもの。それは

あたし……自身だった。

「はっ!?!」

あたしは飛び起きた。

「夢……?」

今見ていたのは一体なんだっただろう。なんだか気分が悪い夢だった。寝汗もひどいし息も荒かった。

「あれ……? ここは……。」

あたしは今、どこかの部屋の中にいるようだった。周りを見渡してみる。あたしが今寝ていたベッドのほかにはテーブルと椅子が置いてあるだけの簡易な部屋だった。窓からは陽光が差し込んでおり、鳥のさえずりが聞こえてきた。今は朝なのだろうか。

「あたしは一体……」

確か屍^{ゲール}食鬼を倒した後にそのままエルフの集落で気を失ってしまったはずだ。だが今あたしがいる場所は明らかにエルフの集落ではない。

それにあたしが今着ているのは学校の制服ではなくて、薄い寝巻きのようなものだった。

一体誰があたしをここに……と、思ったところで、コンコン、と部屋のドアがノックされた。

あたしが返事をして良いものかどうか悩んでいるとガチャリ、とドアノブが回され

「おや、おつめざめですねー!」

ほんの少し開いたドアの隙間から、ひらりと羽根の生えた小さな人間が入ってきた。その姿は

「妖精!?!」

「はいー。妖精のルルシエですよー。おつ加減いかかですかー?」
ひらひらりとあたしの目の前をポニーテールを揺らしながら飛び回ルルシエ。なんだかその様子が夏によく見るあの虫を想像してしまつて……両手で、

パンツ！

「びぎやああああつー！」

女の子にあるまじき悲鳴が聞こえた。

「な……何するんですかーっ!?」

「あ、ごめん。」

合わされたあたしの両手から顔だけ出して憤慨しているルルシエ。その様子がなんだか可愛らしく思えた。

「ルルシエ、何を騒いでいるんですか？」

と、ルルシエの叫び声を聞いたのか、誰かが入ってきた。

「おや、お目覚めですね。」

「あ、ユリン様ー。」

入ってきたのはユリンと呼ばれた人物だ。年は私より少し上くらいだろうか？端正な顔立ち、セミロングの髪は後ろでちょこんと結ばれている。そしてその身に纏っているのは甲冑だ。

「初めまして、ユリンと申します。お体の方は大丈夫ですか？」

礼儀正しく頭を垂れて挨拶をしてくれるユリンさん。格好からして騎士の人だろうか。美人な上に礼儀正しい。

「あ、初めまして、真白といいます。体の方は何とか大丈夫で……」

グウウウッ

言い終わる前におなかの虫が盛大に鳴いた。

「……すみません……。」

すぐく恥ずかしい。ユリンさんはそんなあたしを見てクスクスと笑いながら

「ふふ、すぐに御飯の方を持って来させますね。ルルシエ、頼めるかな？」

「おっまかせくださいーい！」

ユリンさんの言葉を受けてヒューン、とルルシエは飛んでいってしまった。

「はは、忙しい子ですいません。」

と、ユリンさんは椅子を一つ持ってくる、あたしの前におき腰掛けた。そして、

「さて、お目覚めのところすいませんね。まだ色々と困惑されているところでしょうか……少しお話などよろしいでしょうか。」

「……はい。」

ユリンさんの目が優しくなめるものから真剣なものへと変わる。

「あなたは……この世界の人間ではありませんね？」

いきなり核心を突く質問だった。

「どうして……そう思いましたか？」

問い返す。

「まずはあなたの身なりですかね。あなたの着ていた変わった服……あれはこの世界の衣服とは少し違ったようですから。あ、ちなみにあの服はちゃんと洗濯して取っておいてあるので安心してください。後で持って来させます。」

「ありがとうございます。」

「あとは……エルフたちの証言ですかね。」

「ソラビト……ですか？」

よく出来ました、と言わんとするようにユリンさんの顔がはにかんだ。

「エルフ達は空からやってきた人、という意味でそう呼んでいるようです。ですが、僕たちはあなたのようなものをこう呼んでいます。」

ユリンさんは告げる。

「レイグラント光をもたらす者と。」

「光レイグラントをもたらす者……。」

「光レイグラントをもたらす者とは光と共にこの世界へと現れる人間の事です。まあ、このあたりはあなたが異世界の人間だと考える最後の理由と共に説明しましょう。」

「最後の理由ですか……?」

「ええ。あなたは……。」

ユリンさんは一息つくつと

「この世界に呼ばれたんです。姫様によって。」

そう言い放った。

「光レイグラントをもたらす者とはこの世界に召還した異世界人を指すんです。」

はるか昔のことではありますが、幾度となく光レイグラントをもたらす者はこの世界へ召喚され、この世界を平和に導いてきたんです。そしてあなたは今回僕たちが召喚した光レイグラントをもたらす者だという事です。ですからあなたが異世界の人間だと言う事は僕たちにとっては周知のことなんですよ。」

途方も無い話だった。

ただ一つ分かったのは、あたしは本当に勇者としてこの世界に呼ばれたのだということ。そして

「あの、一つ気になる事があるのですが……。」

「はい、なんですか?」

「主に5行前と6行前と20行前のことなんですが。」

「ちょ……ちょっと待ってくださいね……はい、なんでしょう?」

あたしは告げる。

「『僕』ってどういうことですか?」

「……はい?」

沈黙

「……え?」

「え?」

沈黙

「あの……真白さん。もしかして僕のこと女性だと思っていました？」

「え？ 違うんですか？」

「だって見た目も声も……」

ズウウウウウウウウ

「ああっ！ 分かりやすい効果音を上げてユリンさんが盛大に落ち込んだ！？」

「ふふ……そうですか、まあよく言われますけどね……」

「あわわわわ……」

ユリンさんにとってタヴーな話題だったらしい。

「昔からそうです……男らしくない、女々しい、女より萌える、ミスコン優勝候補筆頭……色々言われましたよ……ええ……」

ユリンさんがその熾烈な過去を語り始めた。

「暇さえあれば女物の服を着せられ、競泳大会では僕の水着姿を見て鼻血を噴出す人が現れ……ついこの間も男性に求婚されて……」

「うわあああ……ユリンさんの目が死に始めた！？ な……何とかフォローを……」

「だ……大丈夫です！ユリンさんはよく見るとすごい男らしいです！ ほら、二の腕の筋肉とか超ガチムチしてます。」

「そ……そうですかね。」

パアツとユリンさんの顔に微笑みが戻った。

「言えない……二の腕も色白でスベスベしていてまるで女性のようだなって……」

と、ここで

「おつまたせしましたー。御飯ですよー。」

ルルシエが戻ってきた。その後、続いて給仕の女性が御飯の乗ったキャスターワゴンを押してきた。

それを見たあたしのおなかが再び

グウウウッ

……ものすごく恥ずかしい。

「ふふ、続きの話は食べながらといきましょうか。」

ありがたい気遣いと、目の前に差し出される御飯を目にして二度あたしのお腹が鳴るのだった。

第3話「白き雪のプリンセス」(1) (後書き)

第3話開始です。

この話でようやくこの世界についてが語られていきます。

さらに言えばタイトルの通り、ようやくメインヒロインも登場します。(もちろん今回出てきた蚊ではないです。)

これから諸事情で少し投稿ペースは落ちるかもしれませんが、またよろしく願います。

第3話「白き雪のプリンセス」(2)

「さて、本来はこちらを先に話すべきだったかもしれませんが……あなたの今の状況について話させていただきます。」

ユリンさんの話が始まる。これ以降の話はあたしに対する質問なんかは含んでいないので、食べながら聞いていてくれれば良いですとの事だった。

空腹だったあたしはお言葉に甘え、パンをかじりながらユリンさんの話に耳を傾ける。

「まず、僕たちの住むこの国の名はブランノエル王国といます。

四方を海に囲まれた大陸国家です。およそ400年前に初代の王であるブランレイク・N・クリードがこの大陸を統一し、この国は繁栄を保つてきました。」

ちなみに今ルルシエはユリンさんのお使いに出かけている。

どんなお使いかは内緒だと言うのだが……

「そして、あなたが今いるこの場所は、この国の中心部。王都ナタリシアにある王城【クリステイン城】です。王都の近郊の森のエルフの集落で気を失っていたあなたを、僕たちの団長が保護しました。」

「そうだ。エルフの村は大丈夫だったのだろうか？」

リネットは、髭面の男は、元気な女の子は、しゃがれた老人は大丈夫だったのだろうか？あたしは口の中の食物を飲み込むとその答えを問おうとした。だがそれより早く

「安心してください。幾ばくかの犠牲は出てしまいましたが、あなたのおかげでエルフの集落は最小限の被害で済みました。村人も大部分は無事です。」

「そうですか……。」

ほんの少しだが胸の使いが取れたように感じた。だが、屍食鬼ガイルの前に散っていったエルフたちのことを思うと素直に安堵する事なん

て出来なかった。それにリネットの安否だって分かってはいないのだ。

と、ここで

「再びおつまたせしましたー！」

ルルシエがドアを開け放ち入ってきた。

「お客様を連れてきましたよー。さっすがルルシエ、仕事が速い！
なんとたつて風の妖精ですからねー。さあ、こっちですよー。」

そうルルシエが手招きをすると

「マシロ様！」

「リネット!？」

リネットが駆け込んできた。リネットは部屋の入り口の真ん中に浮いていたルルシエを邪魔だといわんばかりに払いのけ「ぶぎゃあ
ああああつ（断末魔）」一目散にあたしの胸に飛び込んできた。

「マシロ様……良かったデス……本当……ご無事デ……マシロ様
……マシロ様ア……。」

ヒック……ヒック……と、しゃっくりを上げ泣きじゃくりながら
リネットは何度も何度もあたしの名を呼んだ。

「モウ目を覚まさないカト……不安デ……不安デ……。」

あたしの胸がリネットの涙で濡れていくのを感じた。心配……か
けちゃったかな……。

「ゴメンね、心配かけて。」

あたしは泣きじゃくるリネットの髪をやさしく撫でた。

「どうやらあなたは何らかの力を使った反動で深い眠りについて
たようです。丸2日は目を覚ましませんでしたからね。」

「2日!？」

そんなに寝ていたのか……そりゃあお腹も空くはずだ。

「その子はその間ずっとあなたから離れようとしないでですね。僕
たちが最初に駆けつけた時も、その子は足を引きずりながらも凄ま
じい剣幕であなたを守ろうとしましたよ。」

「あ……あの時はすいませんデシタ……また敵カト思っテ……。」

「いえいえ、気にしてませんよ。それであなたを運ぶ際にこの子にも付いてきてもらったんですが、さすがにこの子も怪我などで満身相違でしてね。しばらく別室で休んでもらっていたんですよ。まあでも元気になった用でなによりです。」

「元気すぎるですよ！ まずルルシエに謝るですーっ！」

壁に叩きつけられてのびていたルルシエが復活してくるが

「ウルサイ蚊デスネ。」

パンツ！

「グリユオオオオオ！？」

人のもものとは思えない悲鳴が上がった。

「それヨリマシロ様、お腹が空いてらっしやるのデスヨネ？」

「え……、まあ……。」

「ワタシがお手伝いします！ ふーっ、ふーっ……はい、アーン。」
リネットがクリームスープを一すくいし、息を吹きかけ冷ました後にあたしの口元に差し出した。

こ……これが世に言う王道的羞恥プレイの一つ『アーン』か！？
うああ、これは恥ずかしい！頬を蒸気させ、上目遣いであたしを見つめるその表情が見ていて恥ずかしい！そしてそんなリネットの行動にアタフタしているあたし自身が恥ずかしい！そしてそしてそんなあたし達を見て微笑ましい光景を見るように穏やかに笑うユリンさんの視線が恥ずかしい！

さらに言えば実はリネットが前のめりになっている為、リネットのその豊富な胸が上からぱっちり、下手すると先端が見えそうなくらいに覗けてしまっているのだ！ルルシエは犠牲になったのだあ……

…おっぱいのな……

「ところがどっこい！ ルルシエは不死身なのです。」

もう復活していた。

「そして今のこの空気はルルシエたちはお邪魔という雰囲気ですね

「。ルルシエは空気もばつちり読めるのです。なんたって風の精霊ですからねー。」

「い……いや別に邪魔なんてコトは……。」「むしろいてくれないと変な雰囲気になりそうなんです。」

「きつと御飯を食べ終わったらもう一食イっちゃう感じですねー。」

「食後のデザートはお前だー、ぐへへ。って。」

「ぐへへ。ってあたしか!? あたしが言っているのか!? って
いうか食べません! 食べませんから!」

「食べてくれないんですか……。」

「しょぼんとしてリネットがスプーンを下げようとする。」

「ああごめん、そっちじゃなくて……食べる! よろこんで食べるよー!」

「ほらやっぱり食べるんじゃないですかー。ユリン様ー、ルルシエ
たちは席を外すですよー。」

「そうですね、ルルシエ。僕たちは少し外に出ていようか……1時
間半くらいで良いかな?」

「リアルな数字言うのやめてー!?!」

「っていうかユリンさん、あなたまでノらないでください。」

「ああちなみに浴場は部屋を出て左に向かって突き当たりの辺りで
すから……汗を流される際はそちらにどうぞ。人払いもかけておき
ますのでお気兼ねなく。」

「そんな大掛かりな気遣いもやめてー!?!」

「ありがとうございます。マシ口様、ワタシが隅々まであらわせて
頂きますネ。」

「多分悪気はないんだけどその発言は危険だよ!?!」

「それではごゆっくり。」

「後で感想聞きますよー。」

「二人とも行かないでー!?!」

第3話「白き雪のプリンセス」(2) (後書き)

説明と会話ばかりですね……

しかもまだまだ説明し切れていないという……

毎回言っていますですが本当に展開遅くてすいません。

ただ、最初のうちはやっぱり丁寧やって行きたいのもう少しお付き合ってください。

第3話「白き雪のプリンセス」(3)

本当に1時間半放って置かれた。

しかも廊下には本当に誰もいなかった。浴場も当然誰もいない。

その間あたしとリネットは御飯を食べ終わると、まあせっかくなので浴場へ行って一風呂浴びた。そしてすぐに戻ってきた。以上！特に何もありませんでした！

何も！ ありません！ でした！！

「えーつまらないですー。」

「だまれ、蚊。」

パンツ！

「スリジャヤワルダナプラコツテエエエエツ！？」

どっかの国名？を叫んだ。

「で、どうだったんですかー、リネットさん？」

げっ、1秒で復活しやがった。

「ええ、隅々までしっかり食べていただきマシタ。」

「おやまあ。」

御飯の話ね。

「あと……すごい……熱い体験デシタ……。」

「それはそれはお楽しみでー。」

お風呂のことね。

「それになんだかワタシ高いところに上り詰めて、なんだか気分が高揚してきて……そのあとはマシロさまの一撃で真っさかさまに落とされていって……衝撃で頭がふわあって……幸せでした。」

「あなた、やりますねえー。」

「だー、もう！ 高いところって言うのは何故か知らないけど浴場にあつたウォータースライダーの事！ よくこんなのあるわね流石は王城！ そして気分が高揚してたのはそのときリネットが結構のぼせ気味だったから！ あたしの一撃って言うのは怖がって滑ろうとしていなかったから少し背中を押してあげただけ！ 落ちていつて頭がふわあつてのは滑りおえてお湯にダイブしたら頭がふらふらしたって事！ 幸せでしたって言うのはお風呂は言ったらそんな気分になるでしょ！ 女の子だし！ 以上！ 説明終了！ なんかある！？」

「ぜい……ぜい……あーなんかすごいしゃべったわー。と息を切らしているあたしに向かってルルシエが

「あなたバカですか。そんな夢のないこと淡々と語って……あなたは空気の読めない人ですねー。風の精霊としては大失格です。」

「うるさい。黙れ。潰すぞ。」

「ユリン様ー、助けて下さいー。」

ひゅーん、とルルシエはすばやくユリンさんの背後に隠れていってしまった。

ユリンさんはおやおや、といったような穏やかな顔で事の成り行きを見届けると

「さて、それではキリも付いたようですしそろそろ団長のところへ参りましょうか。着替えも持ってきましたのでどうぞお着替えください。」

すごい、この人今までの流れを全てスルーした。

その後、団長に挨拶に行く事になったあたしだが、今廊下を歩いているのはあたしとユリンさんの二人だけだった。部外者は遠慮してもらいたいとの事だったので、リネットとルルシエは部屋に残してきたのだ。

部屋を出た後に何度か手を叩く音と断末魔が聞こえてきていたが、果たして仲良くやれているのだろうか……。

「それにしても。」

と、ユリンさんが口を開いた。

「リネットさんでしたか。あのエルフの子はとてもあなたに懐いていらつしやるようですね。」

「はは、そうですね。」

確かにまだ出会ってそんなにたった分けでもないのに、やけに懐かれていると言う印象はあった。何か懐かれるような事をしたかどうか？ いや、むしろ……

「嫌われそうな事ならしたんですけどね、驚かせたり耳を掴んだり……。」

「耳をですか？」

ああ、なるほど。といったような感じにユリンさんの顔に笑みが浮かんだ。

「真白さん。あなたはエルフについてどれくらい知っていますか？」

「えっと……そんなに詳しくは知りません。」

精々、耳が長い。狩りをする。といったようなイメージくらいか。エルフというのはですね。昔は奴隷として扱われていたんですよ。

「奴隷……ですか？」

「ええ。貴族たちの労働力として物のように扱われていた時代があったんです。そしてその時にですね。貴族がエルフたちに自分が支配者である事を襲えるために行ったのが……。」

ユリンさんが両の拳で何かを握るような動作をした。

「エルフの両耳を力任せに握ると言う行為です。これによって当時は『お前は私の奴隷なのだ』ということを表していたんですね。」

「え……ということとは……。」

やっぱりあたしはリネットにひどい事を？

「ですが今はそんな習慣はなくなりましたし……むしろその行為は

別の意味を持つものに変わりつつありますね。」

「別のものって……?」

そしてユリンさんはその答えを告げる。

「『あなたは私のものです。』つまり、プロポーズですね。」

「えっえええええええっー!?!」

あああああああたしはなんてことをー!?!?

「大事にしてあげてくださいね。」

「おっおっおっおっ!?!」

責任! 責任取らないと駄目なのか!? 駄目なのか!? なのか!?!?

あたしが脳内でそんな堂々巡りを引き起こしていると
「と、着きましたよ。ここが団長の部屋です。」

どうやら目的の場所に着いたらしい。

コンコン、とユリンさんがドアをノックする。すると

「入れ。」

渋めの男性の声が聞こえた。

ユリンさんはドアノブを回し

「失礼します。光レイグラントをもたらす者の真白さんをお連れしました。」

さあ入って、とユリンさんに目で合図をされ、あたしは部屋の中に入る。部屋の奥、そこには大量の書類の置かれた机の後ろで、深く椅子に腰掛けながらこちらを見つめている壮年の男性が座っていた。

「僕ら、ガーディアンナイツ守護騎士団の団長、ギルナークさんだよ。さあ、ご挨拶に行つて。」

と言われ、あたしは一人団長の前に立った。

白髪しじがの混ざった髪。鋭い目つき。堀の深い顔つき。

歴戦の勇士を思い立たせるようなその風貌に圧倒されそうになる。

「は……初めまして、月宮真白です。」

やや緊張気味にそう言っていると、ギルナークさんは表情も変えずに口を動かさず

「こちらこそ。私はブランノエル王国守護騎士団団長、ガーディアンナイト【銀の守護者】アリアギルナークだっちゃ」

世界が凍りついた。

……

……

あたしは助けを求めるようにユリンさんのほうを見た。だが、ユリンさんは引きつった笑いを浮かべ、困った様子でひたすら首を横に振った。

向き直る。

そこにはまったく表情の変わらない厳ついギルナークさんの顔。

……

……

やばい、どうしようこの沈黙。目の前のギルナークさんは表情を崩さずその鋭い目でずっとこっちを見てきてるし……あれはギヤ

グか？ ギヤグだったのか！？ あそこで笑えばよかったのか！？
でも今更笑ったらものすごい間が悪いし……うわあ、オラなんか
変な汗出てきたぞー。いや、でもこの沈黙をどうにかするにはやつ
ぱり笑うしかないのか？ ほら、じわじわ来る笑いだって有る筈だ
し……よし！ 今からでも遅くない盛大に笑ってやるうじや……

「すまない。私はブランノエル王国守護騎士団^{ガーディアンナイト}団長、
ギルナークだ。」
【銀の守護者^{ガーディアン・シルヴァリア}】

言い直されたーっ！？

すみません！なんだかよく分からないけどすみません！
と、あたしが一人心中でテンパっていると

「それではいきなりだが本題に入らせてもらおう。」
ギルナークさんは何事も無かったかのように話し始めた。

「は……はい！」

なんだかすでにドツと疲れたが……そんなあたしにお構いなく、
ギルナークさんは本題とやらを告げる。

「君に、我らが守護騎士団^{ガーディアンナイト}に入ってもらいたい。」

「今、この国は危機的状況にある。」
ギルナークさんは続ける。

「長年にわたって平穏と繁栄を保ってきたこの国に、敵が現れたの
だ。」

「敵……と言うと？」

「あなたがこの間戦った相手ですよ。」

と、ユリンさんの言葉で思い出す。あの黒く、醜い化け物を。

「屍食鬼……。」

「そう、その通りだ。」

ギルナークさんは言った。

「4年ほど前だったか。そのころよりこの国の至る所で人間の死体である死兵や魔物の死体である屍食鬼が出現したのだ。そしてその支配者だと思われる人物も出現し、奴らは自らをこう名乗った。ノワールベル王国軍と。」

「ノワールベル？」

どこかで聞いたような響きだ。そういえば髭面の男が叫んでいたっけ。

「ノワールベルとはとある国の名前です。そう、僕たちの国ブランノエル王国の前にこの大陸を支配し……。」

ユリンさんは告げる。

「400年前、初代ブランノエル王、ブランレイク・N・クリードが滅ぼした国です。つまり僕らのブランノエル王国はノワールベルを滅ぼして建国されたんです。」

「既に滅んだ……国？」

つまりブランノエルに滅ぼされた国が復讐のために、また再び国を立ち上げる為に立ち上がったと言う事だろうか。

「そうだ。今はなき国の亡者が、死んだ国の旗を掲げ現世を闊歩している。食らい、略奪し、我らが国を脅かしている。死したものはただ朽ちて再び輪廻の輪に戻るのが世の習わしだ。それを破るものに対し、我らは生けるものとして奴らをこの世から往生させねばならん。そのために我々、守護騎士団と守護者は存在する。そして、更なる戦力のため光をもたらす者である君の力が必要だ。」

ギルナークさんは椅子から立ち上がり、あたしの前まで歩いてくると

「我々、守護騎士団へ入団してくれるかね？」

あたしを見下ろしながらそう言った。

「そうだ、あたしは勇者としてこの世界に呼ばれているんだ。守護

イアンナイト

ガーデ

騎士団へ入り、守護者ガーディアンとなって戦う為にここにいるんだ。そして敵を倒して世界を救う。それがあたしの役割なんだ。
あたしはギルナークさんへの答えを返す。

「ごめんなさい。あたしには無理です。」

ユリンさんの顔に少し驚きの表情が浮かんだ。だが、目の前のギルナークさんは眉一つ動かさない。

「どういことかね。」

変わらないの渋い声。感情すら感じられない。だけど怒っているんだらうな、とは思う。

「だって、あたしはただの女子高生なんです。剣が触れるわけでもないし、魔法が使えるわけでもない。弱いんですよ。きつとスライム以下です。」

「これから鍛えれば良いだろう。きつとすぐに上達する。それに君は力を持っているはずだ。ナイフ一本で屍食鬼グールを倒せるような力がある。」

「そんな、あの時はもうがむしゃらで……必死で……どうやったのかも覚えていませんし……。なにより……。」

あたしは……

「……怖いんです。」

ぶちまける。

「怖いんです、魔獣が。モンスター 気持ち悪いんです、刃が肉を絶つ感触が。泣きたくなるんです、どうしてあたしが……って。」
あたしはギルバートさんの顔を見た。やはり表情は変わらない。ただどあたしは言い続ける。
「無理です。無理なんです。無理なんですよ。こんな……こんな……。」

認める。あたしは……

「臆病者には。」

知らず俯いていた。顔を上げる気力もない。だから、今ギルナークさんがどんな顔をしているのかも分からない。

「……君には、国中が期待を寄せているんだぞ。レイグラント 光をもたらす者が来てくれた。これでもう大丈夫だ。この国は救われる。と。」
「はい……。」

「君は、世界を救いに来たのではないのかね？」

何も、言えなかった。

沈黙が訪れる。

お互いこれ以上何も言えなかった。
どれだけ時間がたっただろうか。

「今はもう下がって良い。」

ただ一言、ギルナークさんがそう言った。

あたしは言葉も発せず深くお辞儀をすると、ギルナークさんに

背を向けた。

「ユリンは残れ、大事な話がある。」

「はい、分かりました。……帰り道は分かりますか？」

「はい……。」

力なく返事すると、あたしはドアを開け、部屋を後にした。

パタン、とドアが閉じる。

部屋から出たあたしはそのままふらりと廊下の窓辺に寄りかかった。

(情けないなあ……。)

空が青い。雲はさざ波のように流れている。

あたしは景色を見渡した。遠くには山が。その内側には森が。さらに内側には城下町の景観だ。そしてあたしが顔を出す窓の直ぐ真下、そこにはこの王城の庭だろうか？花畑が広がっていた。

(……………行ってみよう。)

きっとこの時のあたしは少しでも救いが欲しかったのだろう。花の蜜に誘われるミツバチのように、あたしは花畑へ向かって廊下を歩き出した。

そのころの騎士団長室

「で、君はどう思ったかね。」

真剣な面持ちでギルナークは問う。

「どう………といますと？」

ユリンが真剣に問い返す。と

「『ギルナークあのキャラだっちゃん』は、駄目だったかね？」

「……………少々唐突過ぎたかと思われませう。」
「そうか……………」
「反省会が行われていた。」

第3話「白き雪のプリンセス」(3) (後書き)

今回の話はひとつの山場だと個人的には思っています。

ここから真白がどうやって立ち直っていくのか、その鍵が次回第3話の最終回に出てくる予定です。

サブタイトルの意味もようやく出てきます。

このシーンはやっぱり重要なシーンになる予定です。じっくりと時間をかけて書きたいので少し投稿が遅れるかもしれませんが、よろしく願います。

第3話「白き雪のプリンセス」(4)

階段を一つ、二つ降りて廊下をしばらく歩いた。すると廊下の先には少し開けた空間が見え、あたしはそこに向かって歩を速めた。そして

「うわぁ……」

そこは屋根の無い開放的な庭園だった。吹き抜けの廊下と建物に囲まれ、広がるのは彩色豊かな花々の群だ。その間を大理石の石版や砂利によつて作られた道が通っており、庭園の中心部には白い簡易なテーブルと椅子が置かれていた。

トン……トン……

整備された道を石版から石版に飛び移るようにしながら進んだ。歩きながら周りを眺める。花がらや傷んだ葉も詰まれており、しっかりと手入れはされているようだ。今しがた水を与えられたのか、花々は水滴をその身に纏いながら光っている。綺麗だな。と思った。

花の観覧をしながら歩き……時折立ち止まってはまた歩き……やがて中心に着いた。テーブルを見るとやはり綺麗に汚れなどはふき取られた状態だった。

(誰かいるのかな?)

そう思つて辺りを見渡すと

(あ……)
いた。

花々の向こう側に白いレースのリボンが顔を覗かせひらひらと揺れている。メイドさんが花の手入れでもしているのだろうか?

あたしはその正体を確かめなるべく花々の裏に回ろうと石畳の道を歩き、丁度その曲がり角に達したところで

「きゃあっ!」

急に聞こえてきたのは悲鳴だった。そして

「あ………危ない！」

「え？」

と、曲がり際にあたしの視界に飛び込んできたものは

「はさ……み……？」

あたしがその姿を捉えた時にはもう、回転しながら飛んできたそれはあたしの胸元に……

ドスッ

「ぬううあああんじゃああくおりやああああああつ！？」

白の守護者

完

(そんなわけあるか)
頭の中にあの謎の少女の声が響いた気がした。(多分きつとおそらく間違はなく幻聴)

「ハッ！」

あれ？ 生きてる。

思わず閉じてしまっていた目を開く。尻餅をついてしまったようだが、どうやらあたしは生きているらしい。飛んできた鍬が胸にグツサア！ って行った気がしたから死んだかと思った……。

確認に胸を触ってみる。少しばかり痛みは残っていたが、見れば鍬は足元に転がっており、制服も少し汚れている程度で血が滲んでいる様子は無い。ああ、きっと柄のほう当たったんだな。助かった……。

「大丈夫ですか。」

メイド服の少女が駆け寄ってきた。

「うん、なんとかね。」

死んだかと思ったけど、とおしりの砂を払いながら立ち上がる。そしてあたしが初めて間近に見た少女の姿は

(うわぁ……)

思わず感嘆が出るほどの美しさを持った少女だった。

風に流れ輝く、黒檀のように黒く長い髪。雪のように白い肌。それでいて唇は血のように赤い。

まるで童話の中の白雪姫を髣髴とさせるような……。

そんな少女がその綺麗な瞳であたしを覗き込み

「あの……本当に大丈夫ですか？」

「え……あ、うん。本当大丈夫だから！」

思わず見とれてしまっていた。それをばれまいとあたしは慌てて話題をすり替える。

「そういえばどうして鋏を飛ばしちゃったの？」

「すみません……その……そこでお花の手入れをしていたんですが

……」

なるほど、あのときメイドキャップが揺れていたのはしゃがんで作業をしていたからか。作業中に何かトラブルでもあったのだろうか？ 例えば虫が出てきたとか……

「傷んでいた枝葉があったので、鋏で切ろうとしたら……鋏が飛んで行っちゃって……」

「……？」

あれ？ 聞き逃したかな？ 明らかに過程が飛んでいるような……

「ごめん、もう一度言ってもらって良い？」

「はい。ですから傷んでいた枝葉があったので、鋏で切ろうとしたら……鋏が飛んで行っちゃって……」

「……えっと……傷んでいた枝葉があったから鋏で切ろうとしたんだよね？」

「はい。」

「そしたら飛んで行ったの？」

「はい。」

「その間は？」

「？」

首を傾げられた。

「えっと…… 枝を切る 鋏が飛んでいく」の間は？」
「？」

首を傾げられた。

「その…… 虫に驚いた！ とか小石に躓いた！ とかなかったの？」

「いえ別に…… 切ろうとしたら飛んでいったんですけど……。」

「うん、分かった……。」

どうやらこの問答は無駄なようだと気がついた。

暖簾に腕押し、ぬかに釘、三途の川で人工呼吸ってやつだな。うん。

こんな感じであたしが悶々している間も少女はきよとんととしていた。くそう、これが茜だったらチヨークスリーパー物だが……この子は許しちゃおう。だって可愛いし。

「あの、お詫びといっつては何ですが……。」

と、そんなあたしに向かって少女は

「お茶でも如何ですか？」

何時の間にか取り出したティーポットとカップを掲げ言った。

どこから出した！？ とはつつこまない。

だって、可愛いし。

庭園の中心部のあのテーブルにあたしと少女は向かい合って座った。

「初めまして、私はクリスティナと言います。クリスと呼んでいた
だいてかまいません。」

クリスが二人分のカップに紅茶を注ぐ。

「どうぞ。」

そこに白い花びらが浮かべられ、あたしの前に差し出された。

「ありがとう。」

あたしはそれを受け取りカップに口をつけた。熱い液体が喉を通

ると共に、花と紅茶の香りが口内から鼻腔にかけて広がっていく。

「どうですか？」

「うん、おいしいよ。」

少し心が落ち着いてきたように感じた。

「良かったです。それであの……」

クリスの視線が向けられるのはあたしの服だ。

「あなたが、光レイクラントをもたらす者の真白様ですか？」

まあ当然の質問だよな、と思った。ギルナークさんの話だともうあたしの話はかなり広まっているようだったし、この奇妙な服（制服）を見たら一発でバレるか。

あたしはクリスの目を見つめた。

期待に満ちた目だ。きつとこの子も光レイクラントをもたらす者が世界を救ってくれると信じているのだろう。

「うん、そうみたい。」

意気地なしの自分を見せないように、必死に作り笑いであたしは答えた。虚勢だった。だって、あたしはそんなみんなの期待を裏切るうとしていいるのだ。きつとこの子も悲しむだろう。光レイクラントをもたらす者が戦いが怖くて逃げ出すような臆病者だと知ったら。でも、この子を悲しませたくは無かった。だから今だけは世界を救う勇者として嘘を突き通そうと思った。

だけど、そんなあたしに来たのは予想外の言葉だった。

「辛くは……ないですか……？」

「え？」

「怖くは無いですか？ 寂しくは無いですか？」

「……………」

「この世界に来て……あなたは今、幸せですか？」

幸せだよ。とはすぐに答えられなかった。

辛くは無いよ、怖くは無いよ、寂しくも無いよ。とは答えられなかった。

嘘は、付けなかった。

「少し……ね。」

だから、ほんの少し強かった。

「もともとあたしが望んで来たんだけどね。実際来てみると結構大変だなーってね。」

結局あたしはタダの女子高生だったのだ。

「剣なんか握った事ないし、戦闘なんかした事ないし……」

言い訳だな、とは思う。

「まあでも期待されてる以上は頑張らないとね。」

あはは、とから笑いだ。

「真白様……」

スツ、とあたしの両手が掴まれた。そのままあたしの手はまるで祈りをささげるように前で合わされ、それをクリス手が優しく包んだ。

「いいんですよ、頑張らなくて。」

クリスが優しい目で語る。手にはぬくもりを感じた。

「世界を救わないと。とか……そんなこと抱え込まなくていいんです。」

「でも！」

皆が落胆するでしょ？と言おうとしたところで、クリスは首を横に振った。

「光をもたらす者が来たと言う情報が広がっているのは空から落ちた光の目撃者以外では精々城の中だけのはずです。ですからこの世界のほとんどの人はまだそのことを知りません。」

この言葉にほっとしてしまっただ自分が情けない。

「ですからあなたはそんなことを気にしないで……あくまで客人として過ごしていただければ良いのですよ。何も心配しないで……あ

あなたは私たちが何に変えても守ります。そのために私は何でもいたします。どうか……」

こつん、と目を閉じたクリスの額があたしの額にくっついた。

「あなたに、幸があらんことを。」

あたしは単純だ。

今あつたばかりのこの子の言葉だけで。

戦わなくて良いです。守ってあげます。そう言われただけで、まるでつき物が落ちたように心が軽くなった。

（あたしは、この世界を……この子達を守りに来たはずなのに……）
一抹の悔しさ、情けなさは残るが、あたしはこの時確かに救われたのだと思う。

「クリスー。どこにいるのですかー。」

ふいに遠くから、クリスを呼ぶ声がした。

すっ、とクリスの額が離され手がほどかれる。クリスはそのまま立ち上がると

「ごめんなさい、呼ばれているみたいです。」

そう言つて庭園を後にした。

「カップはそこに置いておいてください。後で誰かが片付けに来るはずですから。」

「ね……ねえ！クリス！」

あたしはそんな彼女を呼び止めていた。

「また、会える？」

クリスは振り返ると、にっこりと笑みを浮かべ

「もちろん。今度は城の外を案内してあげます。サンドイッチをバ

スケルトにつめて、景色の良い丘でランチをしましょう。」
そう言って去っていく。

黒く長い髪をはためかせながら、やがてクリスは廊下の先に消えていった。

(何者だったんだろう……あの子は……)

あたしはその方向を、ただただ眺めていた。

「真白さん、ここにいましたか。」

あれからしばらくたったところ。紅茶を飲み終え、庭園を去ろうとしたあたしにユリンさんが声をかけてきた。

ギルナークさんとの用事は終わったのだろうか……？

「あたしに何か用ですか？」

「ええ、団長に挨拶に行つて来たばかりで申し訳ないんですが……今度は王に挨拶に行つて欲しいのです。本当は明日にでもゆっくりとこのことでしたが、王がなんだか良いネタ思いついた……ゲフンゲフン、急に話したくなつたから今すぐ来て欲しいとのことで……」
「え？ 王様ですか？」

そんなに偉い人にも会いに行かないといけないのか！？

いやまあ普通そう(？)だよなあ。勇者として王様に面会するのは当然か。そんなことをぶつぶつ呟いていると

「王は優しく気さくな方なのでそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。それに……」

と、ユリンさんは続ける。

「大丈夫です。あなたがどんな選択をしたとしても、きっと責めたりなんてしませんよ。」

さあ行きましょう。とユリンさんは歩き出した。

あたしはその後を重い足取りで着いていった。

連れて行かれたのは謁見の間のように広いところでは無く、どうやら王様の私室のようだった。ユリンさんはドアの前に立ちコンコン、とドアをノックする。

「ユリンです。」

すると

「どうぞ、お入りください。」

聞こえたのは女の子の声だ。あれ？ 王様って女の人なの？ っ
ていうかこの声って……

「失礼します。さ、入ろうか。」

ユリンさんに連れ立って中へと入る。そこにいたのは
「すいません、父は今少し席を離れていますので……」

黒檀のように黒く長い髪。雪のように白い肌。それでいて唇は血
のように赤い。

目があった。少女はにっこりと笑みを見せる。

「また、会いましたね。」

先ほどメイド服を着ていた少女。いまは、純白のドレスに身を包
んでいる少女。

少女は……

「ブランノエル王国王女、クリステイナ・N・ホワイトスノウです。
今後ともよろしく願いますね。」

まるで童話の中の白雪姫を髣髴とさせるような……そんなお姫様
だった。

第3話「白き雪のプリンセス」(4) (後書き)

これで取り合えず3話が終了です。

もともと3話は4話とセットだったようなものなので、まだまだ説明不足なところも多いと思いますが、そこは4話で回収するつもりです。

第4話「穏やかな日々」(1)

「クリスマスが……ブランノエルの王女!？」

きつと今のあたしの顔は驚くほど間抜けなんだろうと思う。そんなあたしを見てクリスマスはクスクスと口元に手を当て笑っていた。

「良かった、期待道理の反応です。」

「ほえ……?」

また間抜けな声が出た。いやだって、さっきはまるでいち使用人みたいな格好してたじゃん!？」

「あのときはお花を手入れしていたので……ドレスでは汚れるといけないので使用人の服を借りていたんですよ。」

「はあ……?」

「それであなたは私が王女だと知らなかったようなので……使用人のフリをしてあとで驚かせちゃおうかなって。」

えへ。とかわいらしく舌を出すクリスマス。可愛いなあもう。

「おや、お二人はもう面識があったのですか?」

ユリンさんが会話に入ってくる。

「ええ、先ほど庭園で会いました。」

「はい、そこでクリスマスにお茶をご馳走になって……」

「庭園ですか……」

ユリンさんはツンツン、とあたしの方をつつくと

「あの……大丈夫でしたか?」

耳元でささやいた。

「何がですか?」

なにやらクリスマスには聞かせたくないような話みただったので、あたしもクリスマスに聞こえないように小声で返す。

「その……実はですね……」

とユリンさんが話そうとしたところで

「すまない、待たせたね。」

奥の扉から初老の男性が現れた。厳かな衣装に金色の王冠……も
しかしなくてもこの人が……

「いえ、お疲れ様です。ブランノエル王。」

ユリンさんが姿勢をただし、頭を垂れていた。あたしも慌ててそ
れに習う。

「初めまして、月宮真白です。」

「ああ、君が真白君か。体の方はどうかね？」

「はい。おかげさまで。」

「それは良かった。」

そういつて王様ははにかんでいた。優しい笑みだ。クリスのそれ
と変わらない。やっぱりこの二人は親子なんだなと思った。

「だが真白君、まだ疲れているだろう。今日はまあ、城のなかでゆ
っくりしてくれたまえ。」

「はい、ありがとうございます！」

「……………」

あれ？ 何だ今の間は？

見れば王様が少し残念そうな顔をしている。あたし何かやらかし
たか？

「ああ、それと……………」

王様は続ける。

「どうか、娘と仲良くしてやって欲しい。」

「クリスとですか？」

「ああ、齢も近いだろうから話も合うだろう。姫という立場上、城
の中にいることが多くてあまり同年代の友人がおらんな。どう
か友人になっていただけるとありがたい。」

「それはもちろん。」

願っても無い事だ。あたしはクリスに視線を向けた。王様の横で
静かに話を聞いていたクリスはあたしの視線に気付くと朗らかに笑
みを返してくれた。

「はっはっは、そうか、ありがとう。クリスは私にそっくりすぎて少し天然なところがあるからなよろしく頼む。」

「はい、ありがとうございます！」

「……………」

「……………」

あれ？ 何だ今の間は？

見れば王様が少し残念そうな顔をしている。あたしまた何かやらかしたか？

「ごほん、取り合えず今日は顔見世のつもりだったからな、これくらいにしようか。また色々な話は明日以降にでも聞かせてもらうよ。今日は部屋でゆっくりと静養してくれ。」

「あ、はい分かりました。」

「それでは真白様、お疲れ様です。」

ひらひらとクリスが手を振ってきたので、あたしも小さく手を振りながら

「うん、お疲れ様クリス。それでは失礼します。」

「僕も失礼しますね。」

ユリンさんと共にお辞儀をするとその部屋を後にした。

扉を閉めて廊下を歩き出す。

「優しい人ですね。あたしが光をレイクラントもたらす者であることについて、何も触れてきませんでした……………」

この国の最高権力者としては、そこが最も重要なところだろうに

……………」

「真白さん。確かに光をレイクラントもたらす者としてあなたをここに呼んだのは我々です。ですが、王も……………姫もあなたにその役目を押し付けたくは無いのですよ。ただ、あなたにはあなたの望むようにこの世界で過ごしてほしいのです。ですから……………」

ユリンさんの手があたしの肩に置かれた。

「あなたはあなたの選択をしてください。それが、王と姫の望みです。」

「……はい。」

「なんだかあたしはこっちの世界に来て、本当にいろんな人に助けられている。」

「人の温かさというものを身にしみて感じられる日々だ。」

「あ、それと……」

「ここであたしはもう一つ、とても気になったことを口にした。」

「あの、王様の上からぶら下がってたのは何なんですか？」

「ツツコンでもらえなかったな……」

「父様……」

場所は王様の私室。今、王様が見つめているのはとあるL字を象つた小さな装飾だ。それには糸が括りつけられ、装飾はいわば宙吊りの状態にある。ではその糸の先はどこに括りつけられているのかというと、それは小さな釣竿のようなものの先端にあった。そしてその釣竿のようなものは王様の被る王冠に取り付けられている。

「一応聞かせていただきますが、その父上の目の前にぶら下がっているものは何ですか？」

「いや、Lがぶら〜んとしているだろう？」

「ええ……」

「だからLがぶら〜ん ぶら〜んのL ブランノエル……どうだ？
良いネタだろう？ さっき思いついたんだ。」

王様は自慢げに言う。この時クリス、部屋の扉まで4メートル。

「……………」

ススツ（扉まで3メートル）

「……………」

ススツ（扉まで2メートル）

「……………」

スススツ（扉まで0.5メートル）

「……………」

スツ（扉の前）

「では私もこれで、失礼しました。」

「ああ！ 出て行くならせめて何かリアクションを！？ リアクションをー！？」

「……………まああれは王様なりのお茶目と言っか……………まあ気にしないでください。」

「はあ……………」

なるほど、あれで場を和ませようとしてくれていたのか。きっと緊張しているだろうあたしに気を使ってくれるなんて……………やっぱり王様は優しい人だ。

そんなことを考えながら、あたしはユリンさんと廊下を歩き続けていた。

その頃王の私室

扉際での攻防

「せめて評価をくれ。何点だ！？ 何点だった！？」

「3点です……」

「ガーン！？」

「1000点満点で」

「ガーン！？」

こんなやり取りが行われている事を真白は知るよしもない。

第4話「穏やかな日々」(1) (後書き)

4話です。

この4話は嵐の前の静けさ的な話になると思われます。

ただ色々書くことが多いので長くなりそうですが……

まあ今後も一定のペースを保って更新していけたらナと思っていきます。

第4話「穏やかな日々」(2)

部屋に戻るとリネットとルルシエがベッドに横たわっていた。

お互い根尽きたようで、頬をついたりしても一向に起きる様子は無い。壮絶な戦いだったのだろう。

「全くルルシエは……仕方ありませんね。」

ユリンさんはそつとルルシエの体を持ち上げると、顔だけ外にのぞかせるようにポケットに入れた。ルルシエは依然としてむにゃむにゃとかわいらしく眠りこけていた。

「僕もこれで失礼しますね。夕御飯の方はこちらに持ってこさせましょうか?」

「えっと……じゃあお願いします。」

「はい、分かりました。」

そう言うとユリンさんはあたしに一礼し、部屋を後にした。

残されたあたしはポスン、とベッドに腰掛ける。

(色々あったな……)

なんだかものすごい濃密な一日を過ごした気がする。

ため息と共にあたしは後ろよりになった体を支えるように、後ろ手に手をベッドについた。

すると

もにゅ

「おりよ?」

なんだか左手に柔らかな感触ふっくらと弾力のあるこれは……

「あノ……ましろ様?」

振り返る。忘れていた。ここにはリネットが寝ていたつけ。

あたしの左手はそれはもうがっちりリネットのおっぱいを鷲?みにしていて……

「わあ！？ ゴメンリネット！？」

慌てて飛び起きた。

頬を上気させたリネットがベッドの上に座っていた。

「いえ……少しビックリしまシタケド……」

リネットは布団のシーツをぎゅっと掴み

「イヤじゃありませんデシタシ……」

真っ赤な顔でシナを作りながらそんなことを言うので

(こ……これは……)

あたしは困惑する。

据え膳か？ 据え膳なのか！？ 食わないと恥なのか！？ って別にあたしは女だから恥じゃないか。って今別にそう言う問題じゃなくてそんな火照った顔でオツケー、バッチコイ！！的な発言されるにあたしどうして良いのか分からなくなっちゃうぞ！？ 食べちゃうぞ？ 頂きますだぞ！？ 頂きますしちゃうよ？ よしやっちゃおう、せーの！

「真白様、お食事の用意ができました。」

「いただきますああああすっ！！ ほーらリネット御飯が来たよー

！！！ 一緒に食べよー！！」

あつぶねええええええええええええええええつ！！

グツジョブ！ メイドさん！

おかげで変な空気に流されずにすみました。

落ち着いたところでリネットと夕食を食べる。

パンにスープ、野菜サラダ、何かの肉を焼いたもの、それにフルーツといった割とオーソドックスなメニューだ。

あたしはスープを口に運びながらふと思う。

(そういえば……)

あたしはリネットに聞かなければいけないことがある。それはユ

リンさん先ほど言われた事だ。

「ねえリネット。」

「何デスカ？」

リネットはきょとんとした表情でこちらを見る。

「その……あたしがさ、リネットの耳をつまんだ事についてだけど

……」

「そのことデスカ。」

それだけでリネットには通じたらしい。

「もしかして誰かに聞きマシタカ？」

「うん、さつきユリンさんにね。」

「ふふ、隠してイテすいませんデシタ。エルフの耳を掴むノハ、曆れつきとしたプロポーズデスヨ。」

やっぱりかあああああっ！

何？ あたしこの年で妻帯者なの？

あたしが一人でテンパっていると

「心配しないでください。マシロ様がそのことを知らないでワタシの耳を掴んだのはちゃんと分かってますよ。」

「そ……そうなんだ。」

なんだ……リネットも本気であたしの嫁さんになる気じゃなかったのか。ほっとしたような少し物寂しいような……

「デモ……」

とリネットは続ける。

「とても……嬉しかったデス……」

なおも続ける。

「早くに親を亡くしたワタシは幼い頃から家族というものがいませんデシタ。もちろん回りの皆はよくしてくれたデスケド……家族の間にアル血の繋がりのヨウナ……モット親密な関係というモノは知らないままに育ってきマシタ。」

あたしは、それを聞き続ける。

「だから、ずっと憧れてマシタ。いつかとってモ素敵な人が現れテ、

ワタシと一緒になってくれるッテ……」

リネットは

「だから、嬉しかったデス。マシ口様のような素敵な方が現れてくれテ。」

溢れんばかりの笑みであたしに笑いかけてきた。

「あたしは、そんなリネットが言うような素敵な人間じゃないよ。」

「いいえ、真白様は素敵デス。いくら真白様相手デモそれだけは譲りマセン。」

そう言っテリネットがあたしの手を握る。

「ねえリネット。やっぱりあたしにはまだ嫁さんとか色々早いけどさ。でも……」

あたしはその手を握り返す。

「一緒にいよう、リネット。ほら、あたしまだこの世界の事とかよく分からないしさ。いろいろ手伝ってくれるとその……うれしいし……」

後半なんだか照れ気味になってしまった。

「だけどリネットはただ一言」

「ハイ。」

そう笑顔で返してくれた。

「よし、それじゃあ早く御飯食べちゃっテお風呂にでも行くこうか。」

「ハイ、お背中お流ししマスネ。」

「うん。ありがとう。」

「なんだか色々とうやむやな感じで収まったけれど、それで良いのだと思う。」

「このぐらいの距離がきつと今のあたしたちには丁度良いのだ。」

「取り合えず、今はお風呂でのドッキリハプニングでも期待しているあたしだった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8010m/>

白の守護者-Guardian Noel-

2010年10月8日12時23分発行